

園長が職員にのぞむもの

大崎 サチエ

よい幼稚園にしたいというのぞみは、園長の常にもつ念願である。施設が完備していることもよい幼稚園たる一つの条件であることはいうまでもない。しかし、更により幼稚園であるための不可欠の重要な条件は、よい教師がそろっていることである。

教師と幼児との相互の教育活動が円満におこなわれることによって、はじめて教育効果は期待出来るよう。そこで、幼児の幸福な成長のために、園長は、職員に次のようなことをのぞみたい。

(一)常に健康な精神と、からだの持主であるよう努力してほしい。幼稚園の仕事は、真剣に取組めば、相当にエネルギーの消耗する職場である。からだが弱ければ、子どものためのよい援助者とはなり得ない。骨身を惜しんでこまめに動かない不精な教師にならないために、うんと健康であってほしい。

(二)情緒の安定に常に注意してほしい。

喜怒哀楽を、極端にあらわす教師に対して幼児は恐怖心を抱くようになる。幼い子どものちょっとしたいたずらを、すぐに、ひどく怒ったり、ちょっとした失敗を大声で笑ったりするような軽卒さをつつしんで、むしろ幼児のそうした行動の原因を探ぐる冷静さを保持してほしいもの。

(三)マンネリズムにおちいらないで、常に、研究的態度で、幼児の指導にあたってもらいたい。指導法や指導内容を工夫し、研究しようという意欲に燃えながら、日々、新鮮な気持で、子どもに接してもらえたら、子どもらは、さぞ、伸びるだろう。

(四)幼児一人ひとりを大切に公正に取扱っていただきたい。そして、子どもの要求や訴えや疑問に対して優しく親切に、取上げたりの、きいたり、応えたりする正しい教育者

としての心情を、養ってもらいたい。どの子どもをも、心から愛することの出来る教師になってほしいと思う。利害を越えたこの教育者の愛情こそ、教育の出発点であり、また教育効果の終着点を約束するものである。

(五)職場での職員の和を保つよう、各人が、自己中心性的態度を脱皮してもらいたい。つまり小我を捨て、大我を成就育成してほしい。

ひとりよがりには、民主的職員室の調和を破壊する。助け合い、協力し合い、補い合いながら、共に教育活動を営むとき、その効果は幼児の上に影響が及ぶものである。

(六)常に謙虚な態度で、自己反省、自己批判の出来る教師になってほしい。自己の人格性の確立に、努力することは、とりもなおさず子どもによい教育効果を与える教師の資質の向上を意味する。

以上は園長が職員にのぞむことであるとともに、園長が自分自身にものぞむことではないなければならないと思う。(熊本大学付属幼稚園)